

小説 上田ながの
挿絵 しまちよ

薔薇の姫と 百合の騎士

立ち読み版



序章	百合の騎士と薔薇の姫	006
一章	姫のお願い	027
二章	恋人って何をする？	047
三章	姫様とデート	079
四章	牢の中	114
五章	出せない答え	158
六章	騎士	199
終章	そして二人は幸せに暮らしましたとき	222

登場人物紹介

レイナ＝グランフィール

幼少期から、姫であるアスハの近衛騎士として付き従う。白銀の騎士装束とその美しさから、百合と称されている。



アスハ＝ロレンス＝ド＝ローゼン

ローゼン王国第一王女。王国繁栄の為に自分の一生を捧げなければと考えている。薔薇を思わせる紅い髪が印象的。

ローゼン王国は確かに王制、貴族制国家である。

しかし、今や国の政治は王ではなく議会が執り行っている。しかも、議会に所属している人間の大半は平民だ。貴族や王などといった存在は、最早名ばかりのものと化しているのである。それでも貴族は領地を有し、領民から税を徴収する権利などは未だに保持し続けているのだが……（王家はそうして貴族が得た税収を上納させることで軍を養い、貴族達の領有権を保障しているのである）。

ここ数年でそのような特権も徐々になくなりつつある。

（陛下や一部の貴族はそのことを苦々しく思っているようではありますが……。それがそれが時代の流れというもので、陛下達の考えは古い……）

などということを考え――

（い、いけません！ 駄目です！ 陛下に対して不敬なことを考えてはなりません!!）
慌てて自分自身に言い聞かせる。

『どのような間違いを犯そうと、主に尽くす。国に尽くす。それがグランフィールだ。それを忘れるな』

父の言葉が脳裏をよぎった。

そんなレイナの前で、フィリップは延々と自分の話をアスハに対して続ける。実に大仰な身振り手振りを加えながら……。

これをアスハは笑顔で聞き続ける。

浮かべているのは本当に穏やかな表情だ。けれど、付き合いが長いレイナには、明らかにアスハが不機嫌になっていることが理解できた。

「あの給仕は顔が気に入らん。姫様の前に出している顔ではない。我が館から追放しろ」

「あの辛気臭い曲はやめさせろ。姫様の御前だぞ。あいつは首だ」

フィリップはアスハに対しては恭しく接しつつも、城で働く者達に対してはまるで自分が王であるかのように振る舞っていた。平民など自分に傳かたずいて当然というような態度だ。はつきり言ってアスハが一番嫌うタイプである。

それでもイヤだという気配なんか微塵も感じさせない。

（ご立派に成長された）

ちよつと誇らしささえ感じた。

「あの、少し宜よろしいでしょうか？」

そんな時、声をかけられる。

「はい。なんでしょうか？」

顔を向けるとそこには一人の貴族の男が立っていた。年齢は自分よりも一つか二つほど年上のように見える。

「もし宜しければ私と一曲」

そつと手を差し出してきた。

（ふむ……。これは……）

どうするべきだろうか？ 相手は貴族だ。今やほとんど形ばかりの存在とはいえ、プライドが高い。確かにレイナは王女であるアスハの近衛騎士である。だが、グランフィール家の家格はそれほど高いわけではない。そのような存在に公衆の面前で断られればメンツを潰されたと思うかも知れない。となると後でやっかいなことにもなりかねなかった。それならば一曲くらい——そうレイナは考える。

「わかりま——」

だから手を取ろうとした。

「お待ちなさい」

だが、途中で止められる。

「姫様？」

止めてきたのはアスハだった。

彼女は座っていた椅子から立ち上がると、伸ばしかけていたレイナの手を取る。

「貴方には申し訳ありませんが、わたくしも一曲踊りたくまりましたの。ですから……ごめんなさいね」

ニコニコと笑みを浮かべつつ、丁寧な口調で貴族に対してそう告げる。その物腰は実に柔らかいものだった。それなのになんだか有無を言わせない迫力がある。

「あ、は……はい。失礼致しました」

敏感にそれを感じたのだろうか？ 貴族はすぐさま引き下がった。

「それじゃあレイナ、踊りましょうか」

「しかし姫様」

チラッとテーブルに座り呆然としているフィリップへと視線を向ける。

実を言うと彼はまだアスハに対してペラペラと自分がどれほど苦労して新しい館を建てたのか——ということを語っている最中だったのだ。その会話をいきなり有無を言わずに中断してしまったのだから、この反応も当たり前といえは当たり前だろう。

いくら王女とは言え、さすがに非礼がすぎる。そのことを無言でアスハに伝えた。

するとアスハは笑みを浮かべつつ「申し訳ありません公爵。少しだけ我が俣をさせてもらっても宜しいでしょうか？」などとフィリップに告げる。

「は……はあ。その……姫様の御心のままに」

駄目などと言えないはずがない。フィリップは当然のように頷いてみせた。

「それじゃあ……行きますわよ」

アスハによって手を引かれる。

二人で広間の中央に立った。

周囲で踊っていた貴族達が動きを止める。フィリップが用意した楽士達も一旦曲を停止する。広間の真ん中に、円形のスペースが作り出された。姫君のダンスがどんなものか？それを誰もが見たいらしい。皆の視線が一斉に自分達に集まってくるのを感じた。

さすがに少し気恥ずかしさを覚えつつも、自分が怯んでしまっていては主であるアスハ

の恥となる。堂々と胸を張りつつ、アスハと組んだ。

（こういう時に騎士服というのとはなかなか役に立つ）

ドレス姿のアスハに対し、レイナが身に着けているものは白銀を基調としたスラッとしたスレンダーな身体のラインを浮かび上がらせるような騎士服である。女が着るような服ではない。男性用の礼服とほとんど変わりがなかった。

正直なことを言えばあまり身に着きたいタイプの服ではない。

アスハと出会ってから騎士として生きることを受け入れてはいるけれど、それでもレイナだって女なのだ。可愛らしいドレスを身に着けてみたかった。

（例えば姫様が今着ているような……）

可愛いドレスを見つめる。

ピンクを基調とした美しいシルクのドレスだ。アスハが少し動くたびに生地がフワッと浮かび上がる様なんだかととても綺麗である。膨らんだ胸元から花のように広がるスカートが実にキュートだ。どちらかというと小柄なアスハにはよく似合っている。こんな可愛い服を一度でいいから着てみたい。

（まあ、私には似合わないでしょうが）

そこまで考え、自嘲した。

騎士として男のように育てられてきた。今更女らしくしたいなんて考えても手遅れとしか言いようがない。ドレス姿なんかを披露した日には、きっとアスハに笑われてしまうだ

ろう。

などということをごチャゴチャと考えている間に、楽士達が曲を再開してきた。ゆつたりとしたスローテンポの綺麗な旋律の曲だ。

その音色に合わせてゆっくりとレイナは動き始める。宮廷での作法を叩き込まれた際、すっかりダンスも覚え込まれていた。こういった席で主の相手を務めるのも仕事なのだ。アスハもこれに合わせてステップを踏み始める。さすが王宮仕込みと言うべきか——まだ少女と言ってもいい年齢のアスハだけれど、その動きは実に堂に入ったものだった。（まあ、こうして姫様と踊ること自体初めてではないですし）

晩餐会や舞踏会に呼ばれるたび、こうして共に踊っている。そのお陰だか、二人の動きは実に息の合ったものだった。

曲に合わせて舞う。ステップしながらターンする。時折目と目が合った。そのたびにアスハは楽しそうな笑みを浮かべてみせてくる。そんな顔を見ると、自然とレイナの口元にも笑みが浮かんだ。

「ちよつといいかしらレイナ」

アスハ声をかけてきたのは、そのようなダンスの最中のことである。

「えつと……な、なんでしょうか？」

これに対してレイナは少し警戒しつつ応じた。

理由は単純だ。

確かにアスハは微笑んでいる。遠目には楽しそうに見えていることだろう。しかし、口ぶりや瞳の色は明らかに不機嫌時のものだったから……。

先程までフィリップに対してニコニコ応じていたのが嘘のように、言葉には陰が混ざっていた。お姫様らしい「〜ですわ」とかいう口調も完全に消えている。

「なんでしょとかじゃないわよ。まったく。貴女は隙を見せすぎだって、こういう舞踏会があるたびに言ってるでしょ」

ダンスのステップを踏み続けながら、怒りの言葉を向けてきた。

「隙って……私は隙など見せては。どんな不測の事態にも対応できるように常に気を張っていますし」

騎士なのだから当然のことである。

「それは私だって分かってるわよ」

一人称も「わたくし」から「私」に変わっている。

一体いつからこうなったのか？ 正直よくは覚えていない。けれど、気がついた時には二人でいる時はいつもこんな調子でアスハはレイナに対して話すようになっていた。

「でもね、私が言いたいのはそういうことじゃないの」

「じゃ……じゃあどういう？」

「何度も言ってるでしょ。いい？ レイナ。貴女は綺麗なの。貴女が自分で思っているよりもずっと。だからね、その辺の男が虎視眈々と貴女を狙っているのよ」



「そういうわけだから、今日はずっとその格好ね」

そう言うときアスハは躊躇なく店員にワンピースの代金を払うのだった。

「やはり申し訳ないです。姫様に服を買っていただくなんて……」

それから二人で、レイナが城から出た時によく通っている店で昼ご飯を食べつつ、主に對してそのように告げる。

「この店……美味しいわね。もしかしたら城でいつも食べるのより……。って、だから気にする必要なんかなくて言ってるのに。というか……ワンピースなのに腰に剣をぶら下げるって……。それ、なんとかならないの？」

「こればかりは譲れません。というか、気にする必要がないって……姫様はそうでしょうが、私の気持ちの問題というものがあります！」

「うーん、そっか。だったらさ、服を買ってあげた御礼として、一つお願いしていい？ さつき街を歩いている時に見つけたものなんだけどね」

「それは？」

一体何だろうかと尋ねる。

これに対してもぐもぐとアスハは昼食を食べ終えると、とある店にレイナを案内してくれた。

連れて行かれたのはアクセサリー店である。

「ほら、これ」

アスハが店のショーウィンドーを指差した。

「これは……髪飾りですか」

置かれていたのは二つの髪飾りである。薔薇と百合——花をあしらったアクセサリーだ。
「うん。これを買ってもらいたい。一つずつ……構わない？」

アスハは首を傾げてレイナを見つめてくる。普段の凛とした姿とは違う、年相応の少女らしいおねだりするような表情を浮かべながら……。

「もちろん。問題ありませんよ」

断れるわけがない。

ニッコリと笑うと共に、レイナはこの髪飾りを買った。

「えっと、それじゃあ早速つけてもらってもいい？」

「はい。もちろん」

買った髪飾りをアスハの髪につけようとする。

「こんな髪飾りをつけるなんて子供の時以来かも……ふふっ」

嬉しそうにアスハは笑う。その笑顔を見つめ、一旦レイナは行動を止めた。

「どうしたの？」

「いえ……その、ちょっと私も子供の頃のことを思い出してしまいました」

「子供の頃のこと？ それってなに？」

「それはですね……えっと、ちょっとついてきて下さい」

そう言うとき、レイナはアスハの手を取り、街中を歩き始めた。

「えっ？」

レイナの方から手を握ったことに、アスハが一瞬驚く。

「あ、すみません……」

慌てて手を離す。

「……うん。別に構わないわ。恋人同士なんだから。だから……はい」

アスハの方から手を差し出してきた。心なし頬を紅潮させながら……。

「……では、その……し、失礼致します」

そんな主の姿に僅かにドキッとしつつ、そっとレイナはその手を握った。

そのまま二人で王都の郊外に移動する。

「どこに行くの？」

どこかワクワクした様子で尋ねてくる。

「着いてからのお楽しみです」

そんなアスハに笑顔でそう答えつつ、レイナはとある丘に登った。

「ここって」

丘の上に到着すると、そこから見える景色を見つめつつ、呆然とアスハは呟いた。

「いかがですか？ 綺麗でしょう」

眼下に美しい景色が広がる。

王城と、それを取り囲むように円状に造られた王都の全景が……。

夕日の明かりに照らされて、キラキラと輝く街が……。

「うん。凄く綺麗。こんな綺麗な景色があったなんて」

「……私のお気に入りの場所です。昔、騎士の稽古が嫌で嫌で仕方なくて家を飛び出した
りしてた頃、見つけた場所。以来、辛いことがあるたびにここに……。この景色を見てい
ると、なんだか辛さも吹き飛んでしまうような気がして……。姫様が子供の頃などと仰ら
れましたから、私も思い出してしまいました」

アスハと並んで街を見つめる。

「ふふ、一緒ね。でも……確かに……。ここ、凄くいいわ。ホントに何もかも忘れられそう」
などということを呟きつつ、うつとりとしたような表情を浮かべてくれた。

喜んでくれている——そのことにホッとしたものを感じながら「それでは姫様」と口に
すると、実に騎士らしい優雅な動きでレイナは薔薇の髪飾りを取り出し、それをレイナの
頭につけようとした。

「待って」

しかし、止められてしまう。

「あ……その……すみません」

勝手につけるなんてやはりまずかっただろうか——ちよつと落ち込んでしまう。

「いえ、別に謝る必要なんかいいわ。その、こんなところで髪飾りをつけてくれようとするなんて、レイナにしては凄く気が利いてるっていうか、とってもロマンチックで……私、凄く嬉しいから。でも、その……つけるなら……百合の方をお願い」

「こちらをですか？」

アスハといえば薔薇のイメージだったのだが……。

「駄目？」

「いえ、構いませんよ」

もちろん断るつもりなどさらさらない。

改めて百合の髪飾りを取り出す。そして、改めてこれをアスハの頭につけた。

「どう？ 似合ってる？」

「はい。凄く」

紅い髪に百合の髪飾り——白い意匠がアクセントになって、とても美しく見えた。

「ありがとう。それじゃあその……そちの髪飾り……貸して」

「へ？ あ……はい。どうぞ」

薔薇の髪飾りを渡す。

アスハはこれを愛おしそうに手に取ると「ちょっと屈んで」と重ねてお願いしてきた。

「……は、はい」

レイナは鈍い。ただ、さすがにアスハが何をしようとしているのかということに気付く。

ちよつと気恥ずかしさを覚えた。

それでも騎士は王女の命に従い、屈む。

「私は百合——貴女は薔薇よ。ふふ」

嬉しそうに呟きつつ、アスハの頭に薔薇の髪飾りをつけてくれた。

「ワンピースに髪飾り……レイナもすっかり女の子ね」

「う……やはり変ですよ」

「そんなことないわ。凄く綺麗よ」

嬉しそうにアスハは笑ってくれた。

（姫様も綺麗です）

髪飾りを輝かせながら、夕日に照らされるアスハ——美しい景色も相まって普段よりも何倍も綺麗に見える。同性であるレイナでさえも見取れてしまうほどだった。

「本当に綺麗な景色ね」

「はい」

そんな王女と手を繋ぎながら、ぼうつと街の景色を見つめる。

しばらくそのまま、言葉も交わすことなく……。

それからどれだけの時間が過ぎただろう？

「ねえ、もう一つお願いしてもいい？」

街から視線を外したアスハが、レイナを見つめてきた。

「もちろんです。えつと……なんですか？」

当然のように頷き、問う。

「……………」

この問いかけに王女は黙り込んだ。

「姫様？」

一体どうしたのだろうか？

レイナはジッとアスハを見つめた。

この視線に応えるように――、

「キス……して欲しい」

意を決したように王女はそう口にしてきた。

「……それは……」

これにレイナは一瞬言葉に詰まる。

「なんでもしてくれるんでしょ？」

畳みかけるように言葉を向けてくる。

その表情はこれまで見たことがないほどに緊張しているものに見えた。

普段は年下とは思えないほどしつかりしているアスハ。どんな時でも胸を張り、王女として恥ずかしくないように生きているアスハ――そんなアスハが緊張し、硬くなっている。断られたらどうしよう――とでもいうような様子だった。

ただ、それでも、あまり不安は感じない。答えが知りたい。どんな答えであつても、アスハの答えを——そんな様子だった。

一生懸命勇気を振り絞っている——そんな姿に見えた。

「しかし……それは……」

だが、やはり躊躇してしまふ。

「私達は恋人同士なんでしょ？」

しかし、アスハは引かなかった。真っ直ぐレイナを見つめてくる。その表情はどこまでも真剣だった。本気だった。

疑似恋人でしかないのにどうしてここまで？　と思わないこともない。

（私は騎士だ。姫様の騎士。姫様の望みはなんでも叶える。だから……）

躊躇いはまだ残っている。消えることはないだろう。それでも、主の本気の想いには応えたいと思った。

（ただ、私にできるのでしょいか？　ケーキ作りの時とは違います。今度は自分から姫様にしなければ……。しかし、そんなこと……）

可能かどうかは分からない。

それでも、迷いつつも——、

「……姫様」

アスハの肩に両手を置いた。

すると、アスハは一瞬ビクッと身体を震わせた後、少し安心したような表情を浮かべた上で、両目を閉じ、キスしやすいように少し顔を上向き加減にしてきた。

無防備な姿——なぜだろうか？ それを見た途端、キュンッと胸が疼くのを感じた。いや、それだけじゃない。躊躇いや不安も消えていくような気がした。

ドキドキと心臓が激しく鼓動を高鳴らせる。アスハにも聞こえてしまうのではないかとさえ思えるほどに……。まるでアスハに対してときめいているかのように……。

（違う。それは違う。私と姫様の関係は擬似的なものだ。ただ、恋人ごっこをしているだけだ。だからときめきなどあり得ない。そうだろう？ これは違う）

主に特別な想いを抱くなどあつてはならないことだ——と心の中で否定しつつも、ゆつくりと唇を近づけていく。主の吐息が自分に届く。

当然自分の吐息も届いているのだろう。近づけば近づくほど、アスハもより身体を硬直させてきた。それでも逃げずにこちらへと唇を向け続けてくる。

そんな姿に胸が早鐘のように高鳴るのを感じつつ——、

「んっ」

「んんっ」

レイナはそつとアスハの唇に自分の唇を重ねるのだった。



「あっ！ んふっ！ はっふ……あっあっ！ そんな……くっ！ 駄目！ なんか……痺れる……。 んんんんっ……あっあっあっ」

舌の蠢きに合わせて性感が増していく。アスハの愛撫によつて淫らな舞を舞わさせられているような、そんな感じがする状況だった。自然と嬌声を漏らすこととなつてしまう。

「レイナの声……凄くエッチ」

「や……き、聞かないで下さい」

騎士としての自分ではない——女としての自分の声を主に聞かれるなんて、さすがに恥ずかしすぎる。

「んんっ！ くっ……んっんんんんっ」

慌てて口唇を閉じ、漏れ出そうになつてしまふ嬌声を抑え込んだ。

「駄目よ。聞かせて。我慢なんかしちゃう駄目。ほら、こんなのはどう？ こんな風にされても、まだ我慢できる？」

ちゅれろっ……。 れろっれろっ……。 んれろお……。

淫靡に舌が蠢く。レイナの全身を、アスハは躊躇なく舐め回してきた。

乳房が描く曲線を舌尖でなぞってくる。指の一本一本を舐めしゃぶってくる。太股に唇を押しつけて吸い立ててきたかと思うと、時には耳を咥えてチュウウウツと激しく吸ってきたりもした。

「こんなこと……んんっ……一体どこで？」

信じられないほど濃厚すぎる愛撫に、悶えつつ、自然と疑問を口にする。

「ナノの部屋に色々本があつてね。レイナが謹慎してる間に勉強させてもらったのよ」
楽しげに答えを返してくれる。

（そうか、それで初めての時、姫様は私よりもなんだか慣れた感じだったのですか……。
ナノ……なんてことを、今度会ったら叱って……）

などということを頭の中で考える。

しかし、そんな思考の途中であつても容赦なく――、

「ほら……気持ちいいでしょ？　こんな風にされるのがいいって、本に書いてあつたわ」
アスハは愛撫を続行してきた。

「んあつ！　あんんつ！」

耳の穴を穿^{ほじ}るように舌をくねらせつつ、ただ舐めるだけではなく乳房を激しく揉んだりもしてくる。

「はふうっ！　あっあっ……抑えられない。んんんっ！　あっあっあっ」

そんなアスハの愛撫にレイナの身体は敏感に反応してしまう。閉じていた口を開き、再び嬌声を室内中に響かせることとなつてしまった。

同時にジンジンとした疼きを秘部に感じるようになっていく。まるで愛撫を求めるように、腰をクイクイッと振るなどという行為までしてしまう自分がいた。

「……あそこ……濡れてきてる。もしかして、弄って欲しいの？」

当然アスハに気付かれてしまう。

「そ、そのようなことは……」

もちろん弄って欲しいなどと口にはできない。首を左右に振り、否定する。

しかし、思い出してしまう。牢の中で刻まれた快感を……。

愉悅の想起と共に、一目見て分かってしまうほどにレイナの秘部からは愛液が溢れ出す。シヨーツに染みができていった。

グチュツとクロツチが秘部に貼り付く。純白の下着が透け、花卉の形が浮かび上がってしまっていた。

「恥ずかしがる必要はないわよレイナ。私も……同じだから」

そう言うのと、アスハは一旦身を起こし、レイナの上で膝立ち状態になった。

「あ……凄い……」

これにより、アスハの秘部がレイナの視界に映る。

私も同じ——その言葉を証明するように、王女のシヨーツも濡れていた。お漏らしでもしているんじゃないか？ とさえ思えるほどに……。

「レイナの身体を弄ってたら、それだけで私も気持ちよくなってきちゃったの。こんなに濡れちゃうくらいに。ね、一緒にしょ」

はあはあと荒い吐息を漏らしつつ、秘部を見せつけてくる。主のそんな姿に、レイナは再びゴクツと息を呑んだ。

「遠慮なんかしないで。もつと……気持ちよくなりたいでしょ？」

改めて、囁くように問いかけてきた。

「……それは……その……」

「正直な気持ちをお願い」

緋色の瞳を潤ませながら、真っ直ぐ見つめてくる。

嘘なんかつけないと思った。否定なんかできないと思った。

だから――、

「……はい。して……して欲しいです」

頷いてしまう。正直な気持ちを、レイナは口に出してしまっていた。

「そっか……それじゃあ、してあげるわね」

これにアスハは心の底から嬉しそうな表情を浮かべると共に、レイナのスカートを外すと同時に、ショーツを下ろしてきた。グショグショになった秘部が露わになる。ムワツとした発情臭が周囲に広がっていった。

「もう……開いてる」

秘裂が左右に開いてしまっている。ピンク色の花卉が剥き出しとなっていた。愛液にまみれつつ、呼吸をするみたいにヒクヒクとヒダヒダが蠢く。

「見ないで下さい。恥ずかしくします」

牢の時はここまでマジマジとは見られなかった。さすがにはっきりと大事な部分に視線

を向けられるのは辛い。

「そんなこと言われても無理よ。それを教えてあげる」

そう言うと、レイナに見せつけるようにアスハもショーツを脱ぎ捨てた。下着のクロッチ部分と肉花弁の間に幾本も愛液の糸が伸びる。

「あ……これが……姫様の……」

視界に映ったアスハの花弁は、レイナのものと同じくクパツと淫らに咲いていた。鮮やかなピンク色をした肉襞。口を開けた膣口が女騎士の視界に映る。その有様は思わず見られてしまうほどに、いやらしいものだった。

前にも見たものだというのに、以前よりも羞恥を覚えてしまう。前よりも冷静になっている分、余計に恥ずかしい気がした。

「ほら、レイナも私のここ、見てる」

「あ……す、すみません」

見ないでと言ったのは自分なのに……。

「謝る必要なんかないわ。それよりもっと見て。見せたいの、レイナでこんなに興奮してるんだってところを……」

「こ……興奮って……」

普段のアスハからは想像もできないほど、女を感じさせる言葉——そんなものに羞恥を覚えつつも、背中を押されるようにレイナはアスハの秘部へと再び視線を移してしまう。

「どう？ 綺麗？」

見て——と言ってきたのはアスハだ。でも、どこか恥ずかしそうな表情を浮かべつつ、尋ねてくる。

「……綺麗です。凄く綺麗です」

この問いにレイナはほとんど無意識のうちに、素直に答えていた。

これにアスハは嬉しそうな表情を浮かべつつ、

「嬉しい。レイナのも凄く綺麗よ。一緒……一緒に気持ちよくなりましょう」
などと口にしてくる。

「一緒に？」

「こうするのよ」

アスハは疑問に答えるようにレイナの脚を取ると、これを大きく左右に開いてきた。その上でアスハ自身も脚を開くと——、

ぐちゅっ！

「んあっ！」

「あっふっ」

肉花卉に肉花卉を押しつけてきた。肉襞と肉襞が密着する。愛液と愛液が混ざりあうのを感じた。

「な……これって……」

想像だにしていなかった状況に、戸惑いの声を漏らす。

「どう？ 気持ちいいでしょ？」

「それは……その……」

「私は気持ちいいわ。レイナも同じでしょ？」

「あ……ううう……」

恥ずかしい。

伝わってくる熱気。ヌルヌルとした感触——それらすべてに羞恥を感じてしまう。

それでも——、

「はい。気持ちいいです」

嘘をつくことなどできず、レイナは頷いた。

実際心地いい。秘部と秘部をキスするように密着させたにすぎないというのに、全身が弛緩しそうになるほどの肉悦を覚えてしまっていた。重なっているのは秘部だけなのに、全身が密着しているような心地よさに包まれる。

「ふふ、でも、この程度で終わりじゃないわよ。もっと……もっと気持ちよくしてあげるんだから」

「もっと？」

「こうするのよ」

疑問に答えるように、アスハはゆっくりと腰を動かし始めた。

ぐっちゅ！ ぬちゅうう！ ぐちゅっぐちゅっ……ぐっちゅるるうっ！

愛液と愛液が擦れあう卑猥な音色が響いてしまうことも厭わない。腰を淫らとしか言いようのない様子でくねらせてきた。

「ああっ！ なにっ！ んっ！ あっあっあっ！」

秘部が秘部で擦られる。途端に肉花弁同士を密着させた時以上の肉悦を覚えることとなり、レイナは嬌声を響かせることとなってしまった。

「な……これ……こんな……んんっ！ 初めて……あっあっあっ」

牢内で互いの秘部を指で弄りあった時以上の肉悦に全身が包み込まれていく。これまで感じたこともないほど強烈な愉悦に、レイナは嬌声を漏らすだけではなく、表情も愉悦に蕩かせていった。

「んふあっ！ ふっく……あんっ！ あっあっあっ」

そんな騎士と同様に、王女も悦楽の悲鳴を響かせる。

耳にしているだけで脳髓が蕩けてしまうのではないかとさえ思えるほど可愛らしい声を室内中に響かせてきた。

「凄い。これ……あああ……こんなにいいんだ。アソコ……グチュグチュするのって……んん……こんなに気持ちいいんだ……。あっあっあっ！」

気持ちいい——言葉ではなく身体でもそれを証明するように、アスハは白い肌を赤く紅潮させ、全身を汗塗れにしてくる。噎せ返りそうなほどの発情臭を漂わせてくる。

「ねえ……んんんっ……き、気持ちいい？ レイナも感じてる？」

そんな状態で問いかけてきた。

「は……はい。気持ちいい……んんんっ……い、いいです。感じます。私も……あっあっ……。姫様と一緒にです。これ……ヌルヌルしてて……なんだか凄く……いいです」

嘘をつく余裕などない。問いにレイナは素直に答えていた。

いや、ただ答えを返すだけじゃない。

「気持ちよくて……動いてしまいます。私も……腰……あっあっあっ！」

ぬっちゅ！ ぐちゅうっ！ ぬっちゅぬっちゅぬっちゅぬっちゅぬっちゅぬっちゅ……。

アスハの動きに合わせるように腰をグラインドまでさせてしまう。

「んんん！ あはっ！ それ……くんんっ」

レイナの方からもほとんど無意識のうちに強く腰を押しつけたためだろうか？ アスハの嬌声がいつそう大きくなっていく。

「はふう……あはあああ！ はあっはあっはあっはあっはあっ……」

「んっんっんっんっんっ」

グチュグチュという淫猥な水音と、二人の吐息のみが室内を支配していった。

そして――、

「姫様……私……もうっ」

限界が訪れる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！



二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！



二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！



サイズ:文庫

リアルドリーム文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラソベ！



サイズ:文庫

あとみっく文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!